

シェルターメディシン ～よりよい譲渡に向けて～

講演要旨

入交眞巳氏(北里大学専任講師)

1 日目 「イヌとネコの行動学」

● イヌの行動

犬を飼育する際に犬との付き合い方やしつけの方法を知ることが重要である。犬との付き合い方やしつけの方法を調べていくと、「人は犬のリーダーになるべきである」「犬になめられてはいけない」「犬を人の上位に立たせないために、散歩で引っ張らせてはいけない」「犬よりも先にご飯を食べなければいけない」などのコメントを見ることが多い。本講演では、この「犬の上に立たねばならない」説は行動学的にどのように考えるべきなのか、考察した。

犬のように社会性のある動物はコミュニケーションを通してけんかなどの無駄なエネルギーを使わないように関係性を築いている。「食べ物」などのような大切な資源があった場合に「優位行動」や「劣位行動」を示すことで食べ物の譲り合いを行い、資源を譲った方の個体の行動を「劣位」と示すが、この2個体の関連性において優位性、劣位性を示す行動は感情表現にも使われることになる。劣位行動は2個体以上の動物のコミュニケーションで使用すれば、「どうぞ」という意味合いを持つが、この他にも「不安である」「怖い」「自信がない」という感情を表現したり、人で言う「甘える」と言う行動を示すこともある。したがって「優位行動」「劣位行動」は社会性のある動物において状況により様々な動物の気持ちを伝える行動となる。

犬の優位行動と劣位行動はではどのような行動であるか、スライドを見ながら考えた。優位行動はよく知られているが、犬の劣位行動はさまざまあり、口をもぐもぐさせたり、舌をペロッと出したり、体を搔いたり、体をなめたりするような行動である。これらの行動はドッグトレーナーの間で「カーミングシグナル」とも呼ばれているものである。

犬が他の犬やあるいは人とコミュニケーションをこっているときに通常1個体が劣位行動を取ることで2個体の関係性は決まる。よって、人との関係においても犬が素早く劣位行動を取ることが非常によく観察される。講演ではスライドの写真とビデオによって犬が他個体とコミュニケーションを取っていると

ころを見ることで、犬の気持ちを考え、その時に本来人はどのような対策を取らなければいけないかを考えた。特に飼い主に対する犬の攻撃行動があった場合、犬の行動を良く観察すると、犬が人に対して劣位行動を取っていることが観察できる。その事実から攻撃行動は恐怖とそこから攻撃行動を使うことを学習した攻撃行動が多い事が分かる。

飼い主に対する犬の攻撃行動や他の問題行動はよって「犬が人の上に立って優位行動を示している」ようなものではなく、劣位行動を示しながら不安、恐怖を感じているのであるが、人がうまくその犬の気持ちが読めないがためにコミュニケーションがうまくいかず、学習による攻撃行動を出してしまっていることが講演ビデオから確認できる。

今回の講演では、犬の問題行動、特に攻撃行動は決して「人の上」に立つからのものではなく、どちらかと言えば、人とのコミュニケーションがうまくいかず、不安からの問題行動であることが多い事を知って考えてもらった。犬との関係を気付く場合、「犬の上に立つ」ような関係やその考えにのっとりたトレーニング法ではなく、犬とうまくコミュニケーションがとれるような飼い主教育、関係性、そしてしつけ方が重要である。

● ネコの行動

猫は社会性のない単独で生きていく動物であるという認識を持たれているが、もしその説が本当であった場合、ネコの多頭飼育は猫にとって非常にストレスの多いものになってしまう。猫は本当に社会性のない動物であるのか本講演で検証した。

猫はえさが豊富であれば、社会を形成し、グループで生活をする。社会性を持つため、互いを認識し、コミュニケーションもとる。仲の良い猫同士では、体をこすりあったり近くにいるという行動を観察することができる。また、尾をあげて近づくことが観察されており、尾をあげながら近づいて体をこすりつける行動は、親和性を示す行動と考えられる。飼い主が仕事から家に戻ると猫が尾をあげて近づき、飼い主に体を擦り付ける行動は「マーキング」ではなく、「親和行動」であることが分かる。また、猫は子育ても協力して行うことが分かっている。猫の行動を観察すると、社会性のある動物であることはよく理解できる。

2日目 「譲渡された犬がよく見せる問題行動」

● 分離不安症

飼い主の不在時にのみ過度の不安行動がみられる生理的症状。過度の不安行動には無駄吠えや遠吠え、破壊行動、不適切な排泄、自虐行動などがある。分離不安症の症状は多彩である。無駄吠えや破壊行動だけではなく、ふるえ、嘔吐、パンティング、下痢、水をたくさん飲む、自分の皮膚をなめて皮膚炎になるなどが挙げられる。

分離不安症という病気はそんなに珍しくないものであり、北アメリカの調査においては、動物病院に来院する犬全体の約 14%くらいは分離不安症やその傾向があるのではないかと考えられている。

分離不安症を引き起こす要因はさまざまあるが、(1) 飼い主さんがお出かけの際の準備のやり方が変わる、(2) 働きに出ていなかった飼い主が働きに出るようになる、(3) 引っ越し、(4) ペットホテルなどに預けられた後、(5) 家族の構成メンバーが変わった（結婚、出産、新しいペットが来たなどで）、(5) 医学的な他の問題が潜んでいた、などのようなものが挙げられている。また、他のうちに買われていた犬が何らかの理由で譲渡されて新しい家庭に移ったような場合、犬が分離不安症と診断されることは統計的に多いことが分かっている。

<分離不安症の治療>

問題行動の治療は大きく 3 つの方法を組み合わせる。1つ目は環境の整備や調節、2つ目は行動療法、3つ目が薬物療法である。

大好きで頼っている「仲間」の人間が出かけて物理的に離れてしまうと社会動物である犬は多かれ少なかれ不安を感じる。社会性の動物として「離別」は正常な反応である不安を引き起こす。通常不安になっても我々人間はちょっとうろうろしてみたり、家を整理し始めたりいろいろ体を動かしたりテレビをつけたりして不安を紛らわそうするが、犬も同様である。ご家族が出かけてしまうとちょっと不安になっとうろうろしてみたり、吠えて音を出してみたり、トイレに行ってみたり、ドアの周りを行ったり来たりするがそのうち気持ちが落ち着いてきて、「仕方ないかな」と思って飼い主の帰りを待つことになる。

しかし「不安症」という病気があると、不安という気持ちが通常よりも強く出たり、不安な気持ちを抑える脳内ホルモンが足りなくなったりするために気持ちが落ち着かせられなくなり、動物たちはいろいろと派手に行動をして気持ちを抑えようと試みる。この行動が破壊行動や排泄行動という形で我々が認識す

ることになる。飼い主が出かける準備を始めると徐々に不安感が募り、飼い主が「行ってきます」と言って出かけるときはその不安が最高潮にたつする。この最高潮に達した不安を物を壊したり、暴れたり、排泄をしたりしながら徐々に落としていくので、分離不安症の破壊などの行動は飼い主が出かけた後30分程度までが一番ひどいものとなる。そして、飼い主が戻るころにはすっかり落ち着いていて、椅子の上で寝ていたりするような犬もいる。だから、治療としては、不安な気持ちをどんどん募らせないような工夫を環境を変えることで行ったり、飼い主が出かけることに対してあまり不安にならないようなトレーニングをする行動療法といわれるものをおこなったり、不安な気持ちを抑える脳内ホルモンが足りないような場合はその脳内ホルモンを補う薬（抗うつ剤）を使って治療する。

～行動療法・環境の工夫～

- ① 「行ってきます」のあいさつをしない。
- ② お出かけの10分くらい前に犬が長いこと遊んでいられるような犬の好きなおもちゃを与える。
- ③ お出かけのフェイントをかける
- ④ 家の中で粗相をしたり破壊をするからと言って犬をケージの中に入れてお留守番をさせる飼い主もいるが、不安の強い犬を狭いところに無理に入れると余計不安が増えて犬がケージにかみついてけがをしたり、ケージをひっかいて爪から出血したりする。狭い所に入れると不安が増す犬の場合は、狭いケージをつかわずもう少し面積のあるところに閉じ込めておけるような工夫する。

～分離不安治療薬～

不安症の犬は不安な気持ちを落ち着かせる脳内ホルモン（セロトニン）が枯渇している可能性が高いと考えられている。セロトニンが枯渇するとなかなか気持ちにブレーキがかからず、長いこと不安状態になっているので、お留守番を始めた後30分くらい大暴れすることになる。だから足りないセロトニンを補うために「抗うつ剤」と呼ばれる薬を使用して治療する。

もしどうしても即効性のあるお薬も併用したい場合はジアゼパムとかアルプラゾラムといわれるような抗不安剤がある。これは治療薬というよりはその時の不安をちょっと下げる薬で、頓服で服用して抗うつ剤が効果を出すまでの間のその場しのぎの薬となる。

<分離不安を未然に防ぐには？>

まず、お出かけのときは派手にあいさつをせず、黙ってクールに出かける。また、お出かけの10-15分前に犬が夢中になれるおもちゃなどを与え、犬が飼い主の出かける行動にあまり集中できないようにする。お出かけから帰った後もあまり派手にあいさつをしない。このような工夫で問題を未然に防げる犬もいると考える。

● 犬の問題行動予防

犬の問題行動の予防するには犬の発達行動学、その中でも特に犬の社会化期に関して正しい知識を持って置くひつようがある。今回の講演では、犬の発達行動学を学習した。犬は発達段階において、おおよその値ではあるが、3週齢から12週齢まで社会化期と言う発達段階の時期を過ごす。この間にこれからの社会で必要な情報を取り入れ、どのように行動すべきかを学んでいく。したがって、この社会化期に社会性が十分に取れないような飼育を行ったり、学習の理論を理解せずに飼い主が「しつけ」と称して子犬を正の罰を用いて叱るような事をする、問題行動を将来的に示すような可能性が高くなると考えられる。

本講演では子犬の社会化期に十分な社会化を身につけさせる事を目的とした犬の社会化を促す「パピークラス（子犬の幼稚園）」がどのようなものかご紹介し、ビデオを用いて北里大学で行われているパピークラスを紹介した。

パピークラスでは、子犬が将来出会うであろう色々な人（色々な年齢や性別の人、つえをついた人、帽子をかぶった人、サングラスをかけた人、傘を持った人など）と接触し、その人たちからご褒美をもらったり、掃除機やドライヤーなどの環境刺激に暴露し、それらが怖いものではないことを教えたり、また、歯ブラシの仕方、毛の手入れの仕方などを子犬を怖がらせずにできるようになる事を教えている。このように色々な環境刺激に暴露させたり、また、パピークラスの参加する色々な犬と自由に遊ぶことで、人社会、犬社会にストレスなく参加できるようになり、環境や変化に不安を示さないようになると、それが原因となることの多い「無駄吠え」「攻撃行動」などの問題行動を予防することができる。

犬との暮らしを楽しくストレスのないものにするために犬の社会化期には社会化を促すパピークラスやパピーパーティーに参加させるのがワクチンになら

ず子犬への最高な贈り物となるはずである。